Minato Silver News
みなとシルバーニュース　No.93

公益社団法人 港区シルバー人材センター ●令和２年５月18日発行／会員数1,676人（令和２年４月17日現在）

連　鶴

1＋1運動 ～紹介した人&された人～

センターでは健康で働く意欲のある高齢者のために、その知識・経験や希望に沿った就業機会を確保し、生きがいや社会参加がこれまで以上に推進されることをめざして、会員の増強に取り組んでいます。

その一環として「ワン プラス ワン運動」を展開しています。

今回はどのようにして新しい会員が生まれたのか、入会を勧められた立場の私、シルバーニュース編集員の川上が体験した事例を紹介します。

▼出会いはボランティア活動

入会前の私は、数年前から地域のボランティア団体へ参加し、現在も活動中です。

その団体の会議で訪れた麻布区民協働スペースで先輩会員の及川廣子（おいかわひろこ）さんから声をかけられました。彼女とは以前からボランティア活動を通じて面識はありましたが、シルバーセンターの就業について話し合ったことはありませんでした。

入会を勧めた及川さん

私は比較的時間に余裕があったので「自分の都合に合わせて働くことができる?」と質問すると「きっとあなたにあった仕事が見つかるはずよ、あなたのペースで働いてみたら?」と答えてくれました。

本当にそうだろうかと思いながら沈黙していると、及川さんの方からセンターの実情や自分の日程・都合に合わせて就業できる業務があることなどを、自身の体験を含めて詳しく教えてくれたのです。

更に彼女の話は『自分のやりたい得意なことに専念する』との思いで、最近児童小説を出版したことなど夢の実現にまで及んだ展開となりました。

こうした彼女の気さくな言葉や行動の背景から、事情が許す限り〝好きなことを見つけて就業や趣味に勤しむ生活スタイル〟に共感を持ちました。

その結果、選べる自由があるセンターの就業システムは素晴らしいと思うようになり、入会を決意しました。

▼働きがいのある就業

川上利春（かわかみとしはる）（令和元年6月入会）

私はこのような経緯で入会し、現在は港区等から依頼のある地域情報誌などの配布業務に従事しています。この仕事も単にポストに配布物を投函するのみでなく、地域住民との挨拶に始まるコミュニケーションや地域の生きたニュースをいち早くお届けすることができるので、楽しさ満載です。なんといっても一定の期間内に完了すればよいため、自分の都合のつく日時が選択できます。

人とのふれあいで生まれる笑顔はやりがいの元ですし、年を重ねても生活に張りとリズムができ、心と体の健康が保たれています。

みなさんも周りの誰かにセンターの魅力を紹介し、一人でも会員を多く増やしませんか。今度は私が及川さんの役割を担いたいと思います。

１＋１運動とは

一人の会員が入会希望者一人を紹介する

センターでは会員数の増強を積極的に進めていくために「１＋１（ワン　プラス　ワン）運動」を勧めています。

会員全員で取り組みましょう！

昨年度は入会者の約３割が会員の紹介でした。

いきいき働く

未曾有の危機に世界中が巻き込まれた今、私たちにできること

中華人民共和国湖北省武漢市において昨年12月、新型コロナウイルス感染症の発生が報告されて以来、世界各地で患者数が増加し続け、あっという間に世界的なパンデミックとなりました。ついに日本政府も4月7日に史上初の「緊急事態宣言」を発令し、外出の自粛要請で都市から人影が消えつつあります。

新型コロナを予防する有効な対策は「手洗い・うがい」の励行と「マスクの着用」ですが、感染が日本で広がり始めた1月下旬から、マスクは品薄状態が続いています。

◆小物作成グループによる布製マスク

こうした事情を鑑み、センターでは小物作成グループに布マスクの製作を依頼し、3月より販売を開始しました。依頼を受けた当初は職員がネットからダウンロードした型紙を参考にしていましたが、現在は7名の会員がそれぞれ自分好みの型を取り入れ、工夫を凝らして作っています。

大量生産できないため、一人3枚限定。
大人・子供用とも一枚300円（税込み）

奥村有為子（おくむらういこ）さんは初夏に向けてレースの素材で、伊藤未子（いとうすえこ）さんは和服の端切れで絹のマスクを、高田眞子（たかだまさこ）さんはビーズでワンポイント刺繍。また、松浦（まつうら）みほさんは体操教室休止で余った時間を小物づくりに、田沼（たぬま）きぬゑさんは外出も思うようにならないこの時期に、自宅で出来ることがあるのは幸せと。暗いニュースの毎日ですが、好きな柄や布地で楽しみながらのマスク作りは気持ちも華やぐのでしょうか、目に見えない恐ろしい敵をシルバーパワーで吹き飛ばしてくれそう！

写真撮影のために集まったメンバー。作ったマスクはそれぞれ手が込んでいます。

欧米の首脳たちが戦争と呼ぶコロナ危機。フィジカル・ディスタンシング（身体は離れても心の結びつきは忘れないで）を徹底して、来年の東京五輪・パラリンピックを、安心安全な環境で迎えたいと思います。

◆急を要した全戸配布業務

コロナ騒動で仕事が減少する中、港区より『広報みなと・新型コロナウイルス感染症対策臨時号』の全戸配布依頼がセンターに届いたのは3月下旬のこと。依頼から配布終了まで、業務を1週間で終了させることが求められ、説明会を開催する時間もありませんでした。

統括の井原祐三（いはらゆうぞう）さんは配布会員170名のリスト作成に即刻取り組み、配送システムも従来とは変更。印刷所からの配送は、2日間で15万3千部を170名の会員宅へ、分刻みの時間指定で行われました。その後は、地元をよく知るシルバー会員ならではの迅速な仕事ぶり。井原さんは「時間との戦いでした。この緊急事態に一致団結して、皆さん、さすがでした。感謝しています」と安堵の表情を浮かべながら、語っていました。みなさんのお宅にも届きましたか？

衛生委員会を設置

センターでは、請負・委任業務のほか、派遣事業も行なっています。派遣就業会員数も１３０名を超え、働く会員の安全と健康を守る取り組みは重要な経営課題でもあります。

法律（労働安全衛生法）では、一定の基準に該当（常時就業する派遣労働者が50人を超え、指定される業種）する場合は、衛生委員会を設置しなければならないとされています。

港区では、令和元年10月に都内のシルバー人材センターで２番目に委員会を設置しました。

▼委員会の開催模様

委員会は委員長、産業医、衛生管理者、派遣会員を含む６名の委員から構成され、毎月１回開催されています。

毎月の委員会では職場の実態を具体的に把握するため、様々な職場から派遣就業会員を招き、就業先の職場環境の安全や健康面および就業条件などをヒアリングしています。

その結果、労働条件等の問題点が見つかった場合には、就業先へ状況を確認し、ケースに応じた対応を行って改善に結びつけています。

今後も派遣事業への支援が期待されます。

▼草間（くさま）かほる先生（産業医）からのメッセージ

「健康を支えるためには労働条件や環境が大きなウエイトを占めているので、委員会の役割は重要です。もっと大事なのは日頃のみなさん自身の安全・健康に対する意識です。気になることがあれば、まずはセンターの窓口へ気軽に相談してください。一緒になって解決策を考えます。

また、新型コロナウイルスなどの感染症予防には、やはり日本で昔から言われてきたよき習慣である『手洗いの励行』が大切ですね」

私達も今まで以上に意識しながら、衛生面に留意しましょう。

安全運転を支援するサポカーＳ（シニア向けセーフティ・サポートカー）を導入しました

センターでは、高齢ドライバーの事故防止への取り組みを強化しています。

まず、運転業務を75歳の誕生日までとする年齢制限を設けるとともに、年１回、自動車教習所の講習受講を義務付けました。

さらに、講習での専門家による結果判定を踏まえて、就業の継続についての面談も実施しています。

２月からはセンターで使用する全ての車両（７台）を、衝突防止被害軽減ブレーキ等の機能が付いた先進安全自動車、通称「サポカーＳ」に入れ替えました。

地域の皆様に安心していただけるよう、安全運転に努めます。

役員研修視察（令和2年1月30・31日）

柏崎市シルバー人材センター・長岡市シルバー人材センター

社会情勢の変化により、地域を支える担い手として会員数の拡大が一層重要な課題となる昨今、会員増強に成果を上げている新潟県の二市を訪問し、その先進的な取組みを学ばせてもらいました。

アイデアの宝庫 柏崎市シルバー人材センター

厚生労働省は平成30年に「きらりシルバー応援事業」を創設し、全国5ヶ所で機能強化のモデル事業を展開中です。その一つに選ばれた柏崎市は、あまたの機会を活用して会員数と就業の場を確保する仕掛けを実施中。

特に印象的なのは、その入会方法『スマートボーディング』。巧みな説明者の「動画」を見せて参加者の入会意欲を高め、繰り返し見ることで説明会担当者のレベルアップを図り、説明会の頻度も週一回に増やす試みは、まさに一石三鳥の効果が期待できると感じました。

斬新な『会員専用メンバーズカード』は、センターへの来館やボランティア、研修参加などでポイントを貯めると年会費の支払いや協力店利用時の割引に使えるなど、特典が満載。

他にも農場や地元企業を巻き込んだ創意工夫は枚挙にいとまがないのですが、私の一推しは『マンガでわかるシルバーセンター』。20ページの小冊子にセンターから発信したい内容がコンパクトに盛り込まれており、短時間でおもしろく読めました。（宮本（みやもと）　啓子（けいこ））

事務所受付に設置されたメンバーズカードの端末

企業向けに2冊目を作成中

イベントとサークルが魅力 長岡市シルバー人材センター

まず最初に、会員数の増加と退会防止の施策について丁寧な説明がありました。

「市民向けに好評な『スマホ』と『ラッピング』の講習会を定期的に開催し、終了後に入会案内を行います。昨年からは女性が連れ立って気軽に参加できる『茶話会』形式の女性限定説明会をスタートさせて入会を促進中。宣伝媒体によるPRに力を入れており、地元で人気のあるラジオも効果があります」。

「一方、退会届を提出する会員には就業推進員が就業相談をする、一定条件を満たせば年会費を減額するなど、さまざまな手法で退会を抑制しています」。

長岡市では入会と同時に互助会『まごころ会』へ加入することになり、15あるバラエティーに富む趣味のサークルを通して仲間と充実した交流ができます。

私たちが訪れた事務所前のロビーには、リサイクルの学生服がずらりと掛けてありました。不用になった小中高生の制服を無償で提供してもらい、必要な児童や生徒に安価で活用してもらう。寸法直しは会員が有料で引き受けます。シルバーの精神が生かされた独自事業だと思いました。（吉川（よしかわ）　顯（あきら））

リサイクル制服の一部

会員の作品を展示販売

人生の贈り物

ふだんは見られない世界の裏側
宮中晩餐会で出会った英国エリザベス2世女王

楠見（くすみ）國吉（くによし）（芝班）

73歳でセンターに入会。植木の剪定業務に従事して13年になります。ある日、仕事の休憩時間に仲間の会員にお茶をいれてあげたら「とても手慣れた仕種ですね」と感心されました。やはり、長年の経験は、年齢を重ねても体に染みついているのでしょうか。

生まれ育ったのは三重県の漁港。漁師でした。20歳のとき、同郷の知人が経営する国会議事堂内の議員食堂に厨房係として就職。宿舎内に住み込みで働きながら、和洋中の調理師免許を取得しました。料理の素材選びと味覚には自信があります。

後に、衆議院議員食堂の調理師に栄転。時代は昭和30年代、佐藤栄作内閣から田中角栄内閣に変わり、政党勢力が拮抗していたため国会の開催中は食堂でも激しい論争が交わされていました。政治の舞台裏を身近で見ていましたね。今でも、国会や安倍首相の言動は気になります。

その後、裏方の厨房からホール担当のウエイターに転職。東京会館が運営を行う丸の内の東京商工会議所ホール、日本工業倶楽部ホール等で配膳宴会係として就業しました。当時は日本の経済界トップの会合が頻繁に催され、スポーツ界や芸能界の大物が来賓として招かれるなど、華やかな社交場でした。

そのような日々の中で特に印象に残っているのは1975年5月、エリザベス女王歓迎の宮中晩餐会に宮内庁から指名を受け、皇居内で配膳スタッフとして勤務できたことです。

日本で最も格式の高いおもてなしの場が「宮中晩餐会」。料理は正統派フレンチのフルコースが慣例となっており、エリザベス女王側から「お食事のメインは羊で」というリクエストがあったそうです。

丸の内・東京商工会議所ホールにて

1982年4月にはフランスのミッテラン大統領歓迎晩餐会にも派遣され、緊迫した雰囲気の中で「最高のおもてなし」に挑みました。

チャンスはただ偶然に起こっているのではない、準備している人の元に訪れるといいます が、3回の表彰を含め、地道な努力と強い責任感、几帳面な性格がきっかけとなって稀有なチャンスを得ました。

人生100年時代と言われる今、イギリス史上最高齢の君主となられた女王には在位期間を一日でも長く、健やかに過ごしていただきたい。一度だけの来日でしたが、その場に居合わせたことが、私の大切な思い出となっています。

地域班会議の新名称は「ちぃコミ」に決まりました

企画組織委員会

シルバー人材センターには17の地域班があり、会員相互およびセンターとの親睦や情報交換の場として「班会議」を年2回実施しています。

各地域班とも、皆さんが気軽に楽しく参加できるように、毎回それぞれ趣向をこらした班会議を開催していますが、班の役員たちから「地域班会議という名称が堅苦しい」「もっと親しみやすい名称にして欲しい」などの要望が多く寄せられていました。

企画組織委員会では、会員の参加率向上を目指して名称を変更することとし、皆さんと一緒に考えるため「事務局だより」で新名称を募集しました。

その結果、55点の応募の中から、気さくなイメージがあり、覚えやすく、ちょっぴり愛らしい響きもある『ちぃコミ（地域コミュニケーション）』を選びました。

あなたがセンターの近くにお住まいなら「ちぃコミ南麻布」になります。

新名称「ちぃコミ」でのスタートは、令和2年度第1回の会議からです。「ちぃコミ」に参加して、就業のことや、ボランティア、地域の活動などについて活発に話し合い、交流を深めましょう。

新会員の皆さん、センターのことやトピックスに関わる知識、情報を得るとともに、親しい仲間を作るチャンスの場でもある「ちぃコミ」への参加をお待ちしています。

雑記帳

「あっ、鬼が来るよ～」

やっと三語文を喋り始めた難聴の長女は3歳。同年代に比べて明らかに言葉の数は足りないですが、自我も含めて、日々しっかりと成長をみせてくれています。しかしながら、厄介なことに遅ればせながらイヤイヤ期真っ盛り。かたや、まだ1歳なのにお姉ちゃんを真似していやいや言っていうことを聞かない妹。2人は何をするにもイヤッ。お着替えしなさい。イヤッ。ご飯食べなさい。イヤッ。お風呂入りなさい。イヤッ。ネンネしなさい。イヤッ。そうでなくても長女は指示が通りづらい。自然と声が大きくなり、大声を出している自分にイライラ。物事が進まないことにイライラ。この負のサイクルに日々苦しんでいる状況でしたが、正月、実家に帰ってから広島の伝統芸能に助けられることになります。

皆様は神楽【かぐら】をご存知でしょうか。中国地方、特に島根や広島は伝統芸能である神楽が非常に盛んです。

簡単に言うと鬼役と神様役が打楽器に合わせて舞台で舞うといったものです。龍が出たり悪い狐が出てきたりしてバラエティ豊かです。有名な舞は、八岐大蛇、大江山、滝夜叉姫、紅葉狩り等。秋になると毎年親の実家（広島のさらに田舎）で地域の体育館にコタツを敷いてみんなで見ていたのを覚えています。

鬼の面、太鼓、鈴、笛の音が当たり前のように身近にあり、実家ではその鬼の面が魔除けとして、今でも玄関に飾ってあります。

いつも元気いっぱいの娘達が目を伏せ、しがみつき全く動かない。小さい声で2人とも「こわい、こわい…」。

これは使える!!と思い、早速写メでいろんな角度から鬼の面をパシャパシャ。それからは「あっ、鬼が来るよ～」と写真を見せようとすると、あっという間に行動するようになり、苦しめられていた負のサイクルが嘘のように。

今は、広島の伝統芸能、神楽【正確には鬼の面】にどっぷり甘え、フル活用させてもらっています。子供はすぐに慣れてしまうので、いつまで効果があるかわかりませんが。

事務局　栗栖

〒106-0047 東京都港区南麻布1-5-26 TEL 03-5232-9681 FAX 03-5232-9680 ホームページ http://www.minato-sc.or.jp Eメール info@minato-sc.or.jp

趣味悠々

Golf

ゴルフは人生の相棒

風間（かざま） 章由（ふみよし）
（芝浦海岸通班）

ゴルフとの出会いは20代の頃、同じ左利きの先輩から「ハーフセットを5千円で譲ってやるからゴルフをやれ」と言われたのがきっかけ。始めは練習やラウンドもそこそこ頑張ったものの、結局ボールが打てずに1年程でリタイヤしてしまいました。

本格的にゴルフにのめり込んだのは30年後。自分で興した事業に見切りをつけ、これからはIT社会が必須アイテムになると考えてSE（システムエンジニア）を目指し、修行した企業の社長から誘われ、独立してからです。

ゴルフとの付き合い方、その奥深い面白さや知らなかった情報、尽きることのない未知の世界に、これは趣味どころではなく残りの人生の終活そのものだと、大袈裟にも思いました。

年間の数少ないラウンドでの幸せなひととき、楽しそうでいいなぁと皆さんは思われるでしょうが、違うのです。「何一つ上手くいかない、ストレスのたまる苦しい時間。何が楽しいものか⁉」これが現実です。

ラウンドの前夜は熟睡できないまま、明日への期待と今度こそは、のムラムラ燃える胸の内。翌日の結果で打ち砕かれて、さめざめとした気持ちの繰り返し。それでも、四季折々の自然の中にいるだけで心が和みます。

シルバー人材センターの会員になってからは、ゴルフの親睦会『翡翠』を立ち上げました。13人の新人を含む40人ものゴルフ仲間は、私にとって貴重なゴルフ友達。めぐり逢えたことに感謝する日々です。

さらに特筆すべき効用は、ゴルフが家内と唯一共通した趣味になったこと。二人のラウンドでは、罵り合い励まし合って、残り少ない（？）人生でのかけがえのない時間を共有しています。

私にとってゴルフは決して贅沢な道楽ではなく、生涯の健康維持と精神的な支えとなる大切な〝相棒〟なのです。

【総会の縮小開催のお知らせ】

新型コロナウイルス感染予防のため、今年度の定時総会は縮小して開催させていただきます。

会員のみなさまは委任状または、議決権行使書提出でのご参加にご協力をお願いします。

なお、議案書は5月下旬に郵送する予定です。

編集後記

昨秋、あるイベントで、顔見知りの男性会員が青色の千代紙で小さな鶴を折っていました。「これ、あげる。可愛いでしょ」手のひらに乗せてくれたのは羽の繋がった3連の鶴。生まれて初めて見た『連鶴』に、糊で接着したのかと勘違いした私。「一枚の紙に切り込みを入れながら折るので丈夫な和紙がふさわしい。大きな紙で折れば、鶴がいっぱい繋がって圧巻」と教えてくれました。

当初シルバーニュースの表紙は五輪関連でしたが、差し替え案は「吉祥の象徴である連鶴」で編集委員が意気投合。

即刻、折り紙の達人である会員に連絡したところ、和紙の購入から作品づくりまで快く引き受けてくれ、シルバー同士の超高速連携プレーが功を奏した表紙ができ上がりました。

世界中が叡智と心をひとつにして、この難局を乗り越えること、私たちの希望と祈りを込めた『連鶴』です。（中山）